
気まぐれ猫の散歩

月猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれ猫の散歩

【Nコード】

N3341Z

【作者名】

月猫

【あらすじ】

人に疎まれ、苦しい思いをしてきた、元猫・現在妖怪の彪^{ひょう}。妖怪や、霊が見えてしまい、気味悪がられてきた両親のいない少女、ほたる。

そんな2人が出会って、いろいろと学んでいきます。

記憶（前書き）

初めまして。月猫^{つきねこ}です。

思いつきでやっているの、どのくらい続くかビミョーですが・・・。
宜しく願います。

記憶

辛い事、悲しい事、いろいろあったさ。

人は、嫌いだ。ずっと一緒とか言って、優しいフリしてすぐ裏切る。もう期待して、裏切られるのはごめんさ。

なのになぜ、こんなことになったのかな・・・？

誰か教えてよ。

私の名は、彪^{ひょう}。オス。1番最初に、飼ってくれた人がつけてくれた。1番はじめに飼ったくれたのは、年老いた、おばあさんだった。わたしは、まだ子猫だった。この人は優しくしてくれた。まだ目も開かないうちに捨てられた私を。幸せだったけど、そう長く続かなかった。おばあさんが死んでしまった。引き取り手がないわたしは捨て猫となった。

そうしているうちに、今度は男の子に拾われた。大切にしてくれたけど、大きくなるにつれて、相手にしてくれなくなった。そして、疎まれるようになった。この時、わたしは4歳。男の子の家を飛び出し、再び、捨て猫となった。

次は、大人の男に拾われた。男は一人暮らしをしていた。アパート暮らし。狭くて、汚い部屋だけど、仲良く暮らしていた。けれど世の中は、不景気になっていた。男は、会社をリストラされた。1日中家にいて、段々と私に八つ当たりするようになった。酒癖も悪くなくなっていった。ある日、いつものように八つ当たりされた。抵抗したけど、意味は無く・・・。そして私は死んでしまった。私が7歳の頃。

死んでからも、死にきれず、ついに・・・。妖怪となってしまうた。妖怪となった私はもう、猫ではない。真っ白で、トラック1台分はある。耳は後ろに倒れ気味で、尾は長く、フサフサ。大犬の姿に似

ていた。それでいて、猫の姿にも戻れる。白くて、丸い姿に。尾は、丸くて短いけれど。何やら妖力ちからも強いようだし……。これなら、もう、人の世話になんかならなくて済む。私は自由になった。

ほたるの苦しみ（前書き）

更新遅れて、すみませんでした。

これからもこんなことがあったりするかもしれませんが、よろしく
お願いします。

ほたるの苦しみ

5歳の頃、私は両親を亡くした。

五ヶ瀬ほたる。中学2年生。

わたしには、秘密がある。それは、この世の者でないもの。信じてもらえないだろうけど、妖怪や、霊が見える。

両親を亡くしてからは、親戚を転々としてきた。しかし、わたしは妖や霊を見る、不気味な子。周りの人から見たら、嘘つき、気味悪い、変な子、というふうでしかない。そのため、だれもきちんと引き取りたがらなかった。

今住んでいる家の人は、母方の遠縁。今までにないくらい、優しい人たちだった。こんないい家はない。ずっとここにいたい。この人たちに、不気味な思いはさせたくない。そう思って、妖怪や霊を見る事は、秘密にしている。

けれど、家にいたら、いつかその事がバレそうで……。学校が終わると、近くの森の中で過ごす事が多くなった。

ほたるの苦しみ（後書き）

感想待ってます

出会った

今日は、雨が降っている。普通だったら、森になんか行かない。ほたるは、森の入口で立ち止った。

普通だったら・・・。

そう思っていたのに、森の中に入って行ってしまった。来てしまった・・・。

とにかくため息をつくしかない。まあ、雨も少ししか降っていないし、少しくらい良いか。

その時だ。

ドスン！！！！

後ろで音がした。ドキドキしながら、恐る恐る振り向く。そして悲鳴を上げそうになった。思わず腰が抜けた。後ろにいたのは・・・。大きな獣だった。白くてとにかく大きい。目は、銀色。耳が後ろに倒れ気味。尾がとにかく長い。

「む。なんだ、人の子か」

低い声。多分これは・・・。

「妖怪なの？」

「当り前だ」

そりゃ、そうだろう。これが、普通の動物なわけがない。

「お前には、私が見えるのか？」

「まあ・・・」

話も出来るし、見えている。

「雨が降っているのに、何をしている」

そこまで来て、やっと落ち着いた。はたるは立ち上がる。

「関係ないでしょ」

「ふん。ふてぶてしい奴だ」

そんなこと、妖怪に言われたくない。

「あんたこそ、突然何よ」

「少し散歩してただけだ」
そういえば、コイツには話が通じる。ほたるは、もう少し話してみ
ることにした。

稲荷神社で・・・。

雨がやんだ。ほたるは傘を閉じた。

「さっさと帰れ」

大きな獣が言った。

「なによ。ここにいてはだめなの？」

ムツとしたように聞いた。

「お前、人間だろう？私が怖くはないのか？」

「そりゃあね。怖いけど。でも、私の事を食べたりしないでしょ？」

大きな獣がため息をついた。

「ふふ。妖怪とこんなに長くはなしたの、初めてだよ。あんた、名前は？」

大きな獣はじつとほたるを見つめた。そして突然・・・。

どろん

小さな猫になった。

「わあ・・・。なんなの？その姿」

「気にするな。どちらも本当の姿だから。私は彪だ」

「私、ほたるっていうの」

猫姿になると、あまり表情が変わらない。

「では、ほたる。人の子があまりここへ、一人で来るんじゃない」「なぜ？」

「ここは妖が多い。見えるお前なぞ、食われてしまうかもしれないぞ」

彪は目を細めてからかうような口調で言った。

「そうなの？忠告ありがとう。でも、ここはわたしの大切な居場所でもあるの・・・ねえ、明日も来ていい？」

「私はここへは来ないよ」

そう言われても、ほたるは来るつもりだった。それが彪にも伝わっている。

「バイバイ、彪」

ほたるは手を振って別れた。

帰り道。かなりテンション高めで歩いていた。

「その人の子」

突然横から声がした。ほたるがきよろきよろした。

「おーい」

精一杯呼んでいる。声のする方を見た。そこにあるのは……。小さな祠のある稲荷神社だった。

「おーい。人の子ー」

小さな声。

「誰かいるの？」

ほたるは恐る恐る、足を踏み入れた。そして、祠の前に来た。

「えーっと……」

「ここだ。こつち、こつち」

もつと下の方からだ。下を見ると……。

「ふう。やっと気が付いた」

「……わあああああ！……と。小さな妖怪か」

祠の下には、着物を着た小さなおじさんがいた。こういうのにも、もう慣れた。

「何か用？」

「うーむ。やっぱり、見えるのか」

おじさんが言った。

「見えるよ。私はほたる。……君の名前は？」

「私は葛の木。ほたる、少しの間、力を貸して頂きたい」

力を貸す？今までそんなこと、言われたことない。

「……厄介なことじゃ、ないよね。あまり関わりたくないような……」

「そんなこと言わずに。忘れられたこの場所に住んでる、わたしのたった1つの願いなのだ」

葛の木は泣きながら言った。ほたるも、泣かれてはかなわない。

「分かったよ。何すればいいの？」

「おお。ありがたい。手伝ってくれるか」

葛の木は大喜びしている。ほたるは、はあーっとため息をついた。

稲荷神社で……。 (後書き)

どうだったでしょうか。感想、意見頂けたら嬉しいです。

彪が猫姿の時の姿には、いろいろ理由がありますが、私の想像したのだと……。

尾が短いのは、野良猫時代にケンカして……。ということです。

街中にそういう猫がいると悲しくなります。太っているのは、人間から解放されて、沢山美味しいものを食べたから、という設定にしています。

また、読んで頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3341z/>

気まぐれ猫の散歩

2011年12月16日16時46分発行